

(笠を被った旅の女たちが江戸口御門より、入ってくる)

番士 「おい、その方たち、この関所の中では笠を取れ！」

撰津 「はい、笠でございますか？こればかりは・・・ご勘弁下さい。」

番士 「その方たち、高札の一つ目に『関所を出入る輩 笠頭巾をとらせ通すべき事』と書いてあるのが目に入らぬのか！」

浪 「ああ、そうでございますか！ですが、このようにお天道様が出ています間は“死害線”と申すまやかしの光線が出ており、それを地肌に浴びますと・・・すでに臺(とう)が立ってる連れのせつにとつてはとても深刻な問題でございます・・・。」

撰津 「なみだつて、もう少ししたら臺(とう)が立つわよ！」

番士 「何をわけのわからんことを申しておるのじゃ。その方たち調べを行う。こちらへ参れ！」

(女たち、面番所へ行く)

番士 「佐吉！どこにおるのじゃ、佐吉！」

佐吉 「(物陰から登場) あっ、へいへい！」

番士 「佐吉、またさぼっておったのか！足軽たるもの、女改めの際は何かと人手が必要となる故、近くに控えておれと常々申しておろう！」

佐吉 「へ、へい。」

番士 「それより、六尺棒はどうしたのじゃ？」

佐吉 「あ、あの棒ね、あつしの洗濯物干しにちようと良かったもので・・・。」

番士 「何い！物干しに使うておるのか？馬鹿者！あれは不審な者を捉える際に必要不可欠なもので、御上よりお預かりしている大切なものじゃ！早よう持つて参れ！」

佐吉 「あ、じゃあ、ちよつと、控室に！」(控え室でなくても、日替わりでも良い)

番士 「はあ？控室って・・・。」

(佐吉、六尺棒をとりに行く)

番士 「その方たち、関所手形を改める。名を名乗れ。」

撰津 「はい、江戸、日本橋、あかね長屋、次郎吉の娘せつでございます。」

浪 「同じく、あかね長屋、賢の娘なみでございます。」

番士 「旅の目的は何じゃ？」

二人 「はい、お伊勢参りでございます。」

番士 「じゃが・・・その方たち、女の二人旅とはぶつそうじゃな。それに下男もおらんのか？荷物はどうしておるのじゃ？」

浪 「はい、荷物は飛脚に頼んでございます。」

撰津 「私もは、今江戸で流行のお伊勢参りにどうしても行ってみたいのでございます。」

番士 「ふーん、そうか。では、その方ら、改めを行なう！」

二人 「嫌でございます！」

番士 「いや、おぬしらの恥じらいもわからんではないが・・・高札の三つ目にも『関より外に出る女はつぶさに証文に引き合わせ通すべき事』と書いてあったであろう！」

撰津 「ですが、男は良くて、女だけ改めるなど、どうにも合点がいきませぬ。」

浪 「お役人様、何でこの関所では、江戸から出る女“出女”には厳しいのでございますか？」

番士 「おお、そうじゃのう・・・出女と申すのはだな、全国の大名から、各々の妻と娘を奉公人として江戸に住まわせておるのじゃ。」

撰津 「芳香人？いい匂いをするのかしら？」

浪 「人質のことよ！それは一体どうしてでございますか？」

番士 「大名の妻と娘を奉公人、つまり人質として江戸に住まわせることによって、徳川の天下を良しとしておらん大名らが謀叛（むほん）を企てんようにする為じゃ。して、その人質の妻と娘共が江戸から逃げ出して来んようにこの箱根の関所で厳しく監視しておるのじゃ。どうじゃ、わかったか？後ろにおる者たちもご理解頂けたか？では、人見女に改めてもらう。」

浪 「嫌でございます。やはり、どうしても納得いきませぬ！」

撰津 「そうだ、そうだ！」

番士 「その方ら、わしら、役人にたてつくと申すのか？・・・全く・・・とは言え、人見女は何故か数日前より、この通り、固まって動かなくなつてしまつておるからのう・・・（手形に目をやり）んん、それより、せつ、この手形の印判（いんぱん）が違うようだが？・・・よくよく改めてみれば、当方の判鑑（はんかがみ）と合つておらん。よつてこれは似非（えせ）手形じゃ！」

浪 「ええつ？確かにこの手形はとても大変な思いをして、ええつと・・・お・・・（ひらめき）おさるのお役人！」

撰津 「御留守居役！」

浪 「そ、そう、大変な思いをして御留守居役のお役人様より頂いてきたものでございます！」

番士 「おぬしらがどんな思いをしてこの手形をもらうてきたかは知る由も無いが、確かにこれは似非（えせ）手形であるわ！おぬしら、さてはかような似非（えせ）手形でわしらの目を欺き、この箱根の関所を破るつもりでおつたな！関所破りは親殺しと同様の重罪、磔（はりつけ）であるぞ！佐吉！この者たちをひつとらえい！」

佐吉 「ああつ、へ、へい！・・・悪く思わねえで下せえ、悪いのはみんな、あの番士さままでござえやすので！」

番士 「何か申したか？」

佐吉 「いえ、本当の事を・・・（少々小声で）それはそうと、お二方はどこへ行きなさるおつもりで？」

浪 「えつ？お伊勢参りに。」

佐吉 「へええ、お二人でお伊勢参りに行きなさるんではずすかい？いつすねえ！」

撰津 「ねえねえ佐吉さん、私達どうしてもお伊勢参りに行きたいの！手形が無くてもここを通れる方法ありませんか？」

佐吉 「うん・・・あつ、そういえば、お相撲さんと旅芸人は、手形が無くてもここを通られていますよ、（番士に向かつて）ねえ？」

番士 「こら、佐吉！なにが『ねえ？』じゃ！馬鹿者！余計なことを！」

浪 「それは、本当なのですか？」

番士 「・・・んんん、まあ、そのようなこともないことは・・・ない。」

浪 「でしたら、話が早いでございます！私どもは、実は旅芸人でございます！」

撰津 「ええつ？そうだったの？」

浪 「しーーーーっ！話を合わせるのよ！」

撰津 「あつ！・・・そ、そうでございます。私どもはしがない旅芸人でございます。どうかお見知り置きを。」

番士 「おお、そなたたち、何か怪しいと思うておつたが、旅芸人とは・・・ならば、なぜそれを早く申さなんだ？昨今の流行病のせいでいい加減気が滅入つておるからのお。それは楽しみじゃ！早よう見せてみい！」

撰津 「……ねえ、どうするの？」

浪 「大丈夫！落ち着いて、二人でこの場を切り抜けて、お伊勢参りに行くのよ！」

撰津 「あつ、ねえ、佐吉さん、何か芸出来ない？」

佐吉 「あつですかい？いやあ、ものすごい勢いで、あの階段を上ることぐらいしか……。」

番士 「おうおう、何ゆえ、佐吉が女どもの密談に加わっておるのじゃ？」

浪 「じゃあ……お手玉とかは？」

撰津 「……毛玉??」

浪 「て・だ・ま！聞いた私が間違いました。」

撰津 「……じゃあ、お相撲さんのほうにする？」

佐吉 「お相撲さん？面白いっすねえ！」

番士 「(呆れて) おぬしら、ふざけるのもいい加減にせい！」

浪 「(しばらく考えた後に) あ、それでは皿回しをお見せしたいと思います。」

番士 「おお、皿回しか？それは楽しみじゃ！では、早速見せてみい！」

撰津 「なみ、皿回しできるんだ？すごい！」

浪 「何言ってるの、あなたたちもやるのよ！」

佐吉 「ええっ？あつしもでげすかい？」

浪 「番士様、この関所にいい感じのお皿と棒、ありませんか？」

(皿と棒、出てくる)

三人 「それでは、なみとせつと佐吉の皿回し、はじまりはじまり！」

浪 「それでは、何の変哲も無いこのお皿をこの棒の上で回してみたいと思います！」

撰津 「上手く回りましたら、拍手ご喝采の程、よろしくお願いいたしまーす！」

浪 「(何となく回る) はいっ！如何でしょう？」

佐吉 「いつもより多く回しております！」

番士 「おおっ、愉快じゃ愉快じゃ！周りの皆も『こんなものか』とは思いますがまあまあ楽しんでおったな！」

撰津 「よかったあ〜！」

浪 「では、私たちはこのまま関所を通りまーす！よかったよかった！」

佐吉 「いつてらっしゃいませ！道中、お氣をつけて！」

番士 「待て待て待てい！何が『お氣をつけて』じゃ！佐吉、後ほどじっくり説教じゃ！」

撰津 「ええっ？ですが、お役人様も楽しかったと言ってくれましたが？」

番士 「芸はさておき、似非手形を以ってこの箱根の関所を通ろうとするなど不届き千万！おぬしらをこのまま通すわけには参らん！詮議(せんぎ)が済むまで、しばし、獄屋へ入っておれ！」